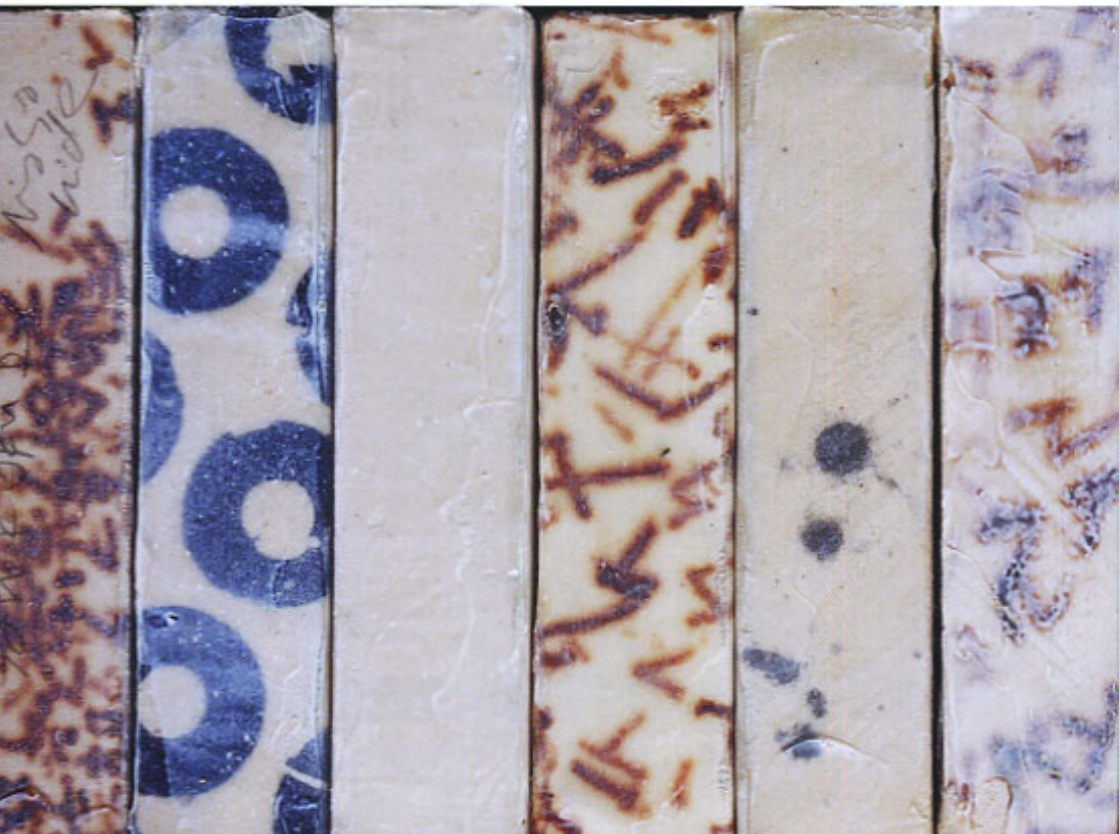


船 団

第 103 号

特集

言葉について
考えよう



坪内 稔典

弟はすぐぶら下がる夏の夕
弟は屈強の他者ギンヤンマ
弟は明日も弟夕焼ける
夕焼けの窓を脱出弟は
空は紺タンスはゴンの夏の果て
システムの不具合だろうカマキリは
秋高く犀のあいつが弟か

鶴濱 節子

合歓咲いてルパン三世忘れ物
梅雨晴間呼吸している赤い屋根
鞍馬から祇園に来たか山の蟻
白南風や妊婦二人が歩み来る
旅に出て瀬音の闇に河鹿鳴く
炎昼を恋もしつぽも忘れ来て
かなかなや出て来る出て来る留学生

● 会員作品 ●

田 彰子

近づきて蛩と同じ息づかい
蟬穴のひとつひとつに水の音
白南風や日本最古の顕微鏡
らつきよの歯ざわり君の落としどころ
白南風や骨の絵のあるログハウス
ウミガメの星をいくつか生み落とす
いつからか寝そべっている天の川

鳥居 真里子

蛇穴に入る合掌に隙間あり
夏百夜白紙一枚これは母
萩は白うっかり恩を着てしまふ
半身は青蔦半身は鬱
荒野野菊知らない人と手をつなぐ
ひとでなし真ッ赤に柘榴割つてみよ
人間の水より駱駝の水澄めり

中井 保江

夏燕京に梁ありうだつあり
そのまつ毛あにつけまつ毛この毛虫
水かきを持たずに生まれ夏の潮
ハワイアン足踏むそこは夏の浜
梅雨空を蹴ってヒップホップの少年ら
七月一日戦争が起きるかもしれない
言いたいこと言ってしまえばなめくじり

中居 由美

雨蛙雨連れて来て雨残す
人の世の夢の数だけさくらんぼ
サイダーの気泡なにやら卵めく
大いなる跣足投げ出すヨガマット
噴水に大胆な水シャイな水
もう誰の汗の匂いかわからぬよ
海水と真水の間天の川

● 会員作品 ●

中谷 三千子

窓若葉世界鳥類切手展
父の家風に素直でない風鈴
水替えたばかりというのにもう金魚
食卓に眼鏡が三つ冷素麺
大声で猿の悪口滝まっすぐ
今帰りだったら向日葵剪ったげる
水中花早く帰ると言ったのに

長沼 佐智

水色のばらばら漫画梅雨の入り
ジューンドロップ胸のボタンのきにかかる
赤い鼻緒が一番のりに鮎解禁
黒南風の路地古代の匂い住んでいる
電波塔どこまで飛ぶの枇杷の種
気がつけば奥へ奥へと草田男忌
水音の所へ行こう夏休み

中林 明美

蕪村かも信号渡るサングラス
大阪のおばちゃん鰻ひとつねり
天空の宙区宙町梅を干す
十二番札所の前の半ズボン
自転車ではしる余呉湖の風青し
顎ひげの短く若く京の夏
日盛りをまどろむ一角獣と俺

中原 幸子

忘れな草忘れな色に奈良七重
目のまえに君の目のあるメロンかな
カバン赤い重い会いたい雲の峰
晴れの海静かの海や藍浴衣
喜劇ばかり流行るポンポンダリア咲く
日盛りを手のひらに受け祖母だった
北極海南極大陸瀬祭忌

● 会員作品 ●

早瀬 淳一

ハンムラビ法典からの夏の蝶
一宮二宮三宮暑し
グランフロント大阪一匹で鳴く油蟬
油照インシャアットと言う男
夏の果流せるトイレクリナー
秋の野はトランペットのためにある
コスモスや宇宙船には栗ようかん

原 ゆき

西日には余分なことが多すぎる
ここは夏の森の入口という塗り絵
殺してもわからないほど青い山
再会の宵のオリオンビールかな
パーマ液うなじに垂れるアマガエル
水滴に観音菩薩居て涼し
鶏肉のごとく目覚めて八月よ

阪野 基道

沖の世をわたる蝶あり少女病む
柘榴 割れ 少年の飢え 赤きシャツ
みどりこの太古の母音たれかれも
虫かごに残んの夏の行き来する
鬼灯や修司バイブル風に揺れ
ものはみな歌で終えたしかき氷
うつ、ビールに浮いてた羽虫のんじやつた

東 英幸

妹も僕も白シャツ父との日
梅雨冷のウッドベースの横たわる
合歓木にからまつてくる水の音
眠れぬ森の美女夏風邪引いたかも
緑降るその明るさの桜の木
三姉妹次々帰る西日中
朝の猫の見ている八月十五日

● 会員作品 ●

火箱 ひろ

みんなのみんな何度もやりなおす
白玉のつるんと昔々かな
お変わりもなくお元気で冷素麺
ほ・ほ・ほたる老いてとほうにくれている
三伏の真っ赤な箱の焼餃子
墓参り夜は狸が来たりして
バルテュスの少女さておき大文字

陽山 道子

廃寺の木モリアオガエル生まれる木
まほろばの蛍を連れて彼
友といていつか小声に蛍の夜
父が逝き母は生き七月を行く
立ち姿よく七月のレクイエム
風鈴の場所替えたりして真昼
アイスノン抱き抱きす真夏の道路